

まちの史跡めぐり

177

町文化財専門委員 石龍 豊美夫

新原海軍炭鉱の雑誌『新原』(1)

『新原』は、タテ23・2cm、ヨコ16・5cmの大きさの雑誌です。週刊誌大のB5判よりは小さく、『文藝春秋』など月刊誌大のA5判よりは大きいサイズです。

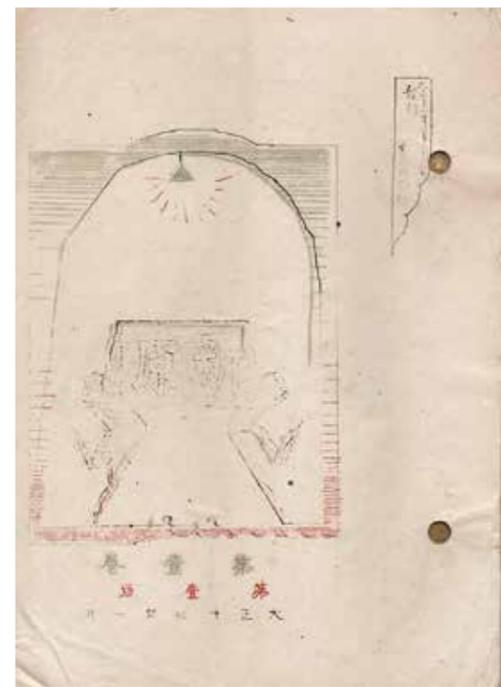
第1号は表紙・裏表紙・白紙を含めて42ページ分で、21枚を右端の割紙2個で綴じ、表には鉄の頭が見え、裏は上と下に鉄の差し込んだ先端が広がっています。

インクが劣化している可能性もありますが、見たところ印刷の状態はよくありません。しかし、表紙の図案や挿し絵などにデザインの工夫があり、大正時代のセンスがうかがわれます。

紙質は、わら半紙よりは少し上質という程度の粗末な紙で、半枚の両面に印刷したものと、1枚を二つ折りして袋綴じになったものが交じっています。

号数と発行日は次のとおりです。大正13年(1924)の第1巻が1月発行の第1号から12月発行の12号(11号が重複)、翌14年が第2巻で1月発行の第1号、2月発行の第2号までが揃っています。毎月25日発行。大正14年3月以降が発行されているかどうかはわかりません。百年近く前の雑誌ですから、

発行元の記載はありませんが、第1号に猪俣昇が「新原発刊ノ趣旨」を書いており、海軍燃料廠採炭部の公式の機関誌と言えます。猪俣は当時、海軍技師でした。九州帝国大学工学部出身で、後に海軍技術少将となりました。



1号の表紙

書き出されています。役員は事務職員の意味でしょうか。謄写版ですから、せいせい数

百部の発行かもしれません。猪俣によると雑誌発行の目的は従業員としてこれまで怠っていた、品性を磨くことです。また、従業員同士、知識や経験を交換することであり、さらには文化的な向上を目指すことでした。

今回は、1号から4号までの表紙写真を掲載します。

1号の表紙は不鮮明ですが、坑口を描き、真ん中に『新原』と誌名を書き、上には電灯が光を放っています。

2号の表紙は「採炭部創業以来産出炭額」という棒グラフです。右端が明治24年、左端が大正11年です。12年は空欄になっています。

で、上が大正12年12月中全国石炭産出額」です。福岡が半分以上を占め、以下北海道・福島・佐賀・長崎・山口・茨城の順になっています。下は文字が不鮮明ですが、同年同月の「粕屋鉱業石炭産出額」と見えます。半分近くが海軍、第2位・第3位は、はつきりしませんがおそらく「福岡」「姪浜」でしょう。次は「高田」「粕屋」「亀山」「久原」などが並んでいます。



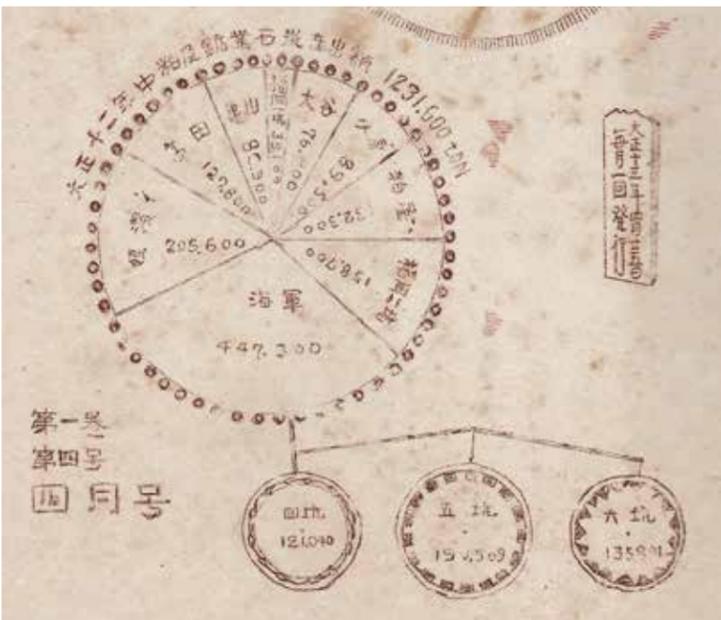
2号の表紙



3号の表紙



4号の表紙



4号の表紙 下の円グラフ(拡大)

(注) 謄写版とは、印刷方法の一種で、ガリ版ともいいます。